

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年10月15日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士課程3年

氏名 下田和宣

助成の種類	平成26年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成	
研究課題名	文学哲学の歴史におけるヘーゲルの位置	
受入機関	ドイツ クリスティアン・アルブレヒト大学キール	
渡航期間	平成26年10月1日 ～ 平成27年9月30日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無	
会計報告	交付を受けた助成金額	2,700,000円
	使用した助成金額	2,700,000円
	返納すべき助成金額	0円
	滞在費	2,700,000円
	助成金の使途内訳	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 滞在期間の開始時に一括して交付していただいたのはいろいろと用意を進めるうえで助かりました。発行していただいた経費負担証明書は、ヴィザ取得時に役に立ちました。	

報告者はキール大学（ドイツ）にて、2014/15年冬学期から2015年夏学期までのあいだ（2014年10月～2015年9月）、本助成のもとで研究を行った。当地ではラルフ・コナースマン教授の指導のもと、講義・ゼミナール・コロキウムへ参加し、具体的な論文指導を受けつつ、京都大学へ提出予定である博士論文の作成を準備した。また、同大学の語学講座の制度を利用し、語学力の向上に努めた。

現代ドイツにおける哲学研究の現場において注目を集めつつある分野が「文化哲学」である。カッシーラーやジンメルなどが20世紀初頭において展開した思索の伝統を受け継ぎながら、多文化主義やグローバリズムといった「（諸）文化」をめぐる現代の思想的・社会的状況を睨むことで、文化哲学は21世紀において自らに固有の思考領域を新たに定めつつある。そこには、文化現象の本来的な複数性ないし異他性を、（前世紀の文化哲学も含めた）西洋哲学の伝統は果たして正当に思考してきたのかという自省が伴っている。この問い直しによって現代的文化哲学が試みるのは、西洋近代哲学の依拠してきた思考の自律性を自明視することなく、むしろその自律性を可能としてきた思考の「コンテクスト」を最大限視野に引き入れることであり、「文化とは何か」と問うことを思考の自己省察として遂行することである。哲学的思索を自身の持つコンテクストに直面させることは、したがって哲学研究の枠を、諸々の経験的な文化学の知見へと積極的に拡大し、文化学的発見を一つの思考として提示するという可能性を持つ。このような超領域的作業を担保し、それを再び哲学史研究へとフィードバックすることで、従来過小評価されてきた思想家の再評価をもとに、これまでとは全く異なった哲学史記述もまた構想されていく。こうしたコンセプトの具体化として、例えばブルーメンベルクの「隠喩学 (Metaphorologie)」やコナースマン教授の提唱する「歴史的意味論 (Historische Semantik)」が挙げられる。これらの目下進行中の展開は、コナースマンの主導する「文化哲学ネットワーク」(Netzwerk Kulturphilosophie) の活動、あるいは彼の編集した『文化哲学ハンドブック』(Handbuch Kulturphilosophie, J.B. Metzler, 2012) や『文化哲学雑誌』(Zeitschrift für Kulturphilosophie) のうちに見て取ることができる。

報告者は執筆中である自身の博士論文において、このように示される文化哲学的問題関心に依拠することで、かねてより研究を進めてきた19世紀ドイツの哲学者であるヘーゲルの諸著作に対する新たな読解を試みている。歴史哲学に裏打ちされたキリスト教中心的なヘーゲルの文化論は、西洋哲学における理性主義的伝統の最も極まった形態であると評価されることが多い。本研究ではしかし、ヘーゲルの思索が歴史文化の諸現象を覆い尽くしていく様を現代的観点から批判的に取り上げるのではなく、むしろ文化哲学的問題関心から、文化の諸現象が哲学的思索に内在的な必然的ファクターとして変容していく過程に着目する。ヘーゲルの思索において文化的諸現象がその哲学の内部に最も内密な形で浸透

しているということ、このことがまず正確に取り上げられるべきであり、かつ文化哲学の歴史のもとで改めてその意義が確かめられるべきなのである。

キールでの滞在にあつて、この論文計画は大きく進展することとなった。とりわけ現代ドイツの文化哲学の旗手たるコナースマン教授との、授業を通じた、あるいは個人的な面談におけるやり取りの中で、当該分野に関し他所では得ることのできない有益な情報に接することができた。2015年夏学期でのコロキウム（研究発表演習）では、報告者の博士論文の一部について「ヘーゲルのヤコービ解釈。その文化哲学的意味」と題して発表を行い、独自の観点からの指導を受けることができた。そのほか、とりわけ滞在の成果と言ってよいのは、ブルーメンベルクの「発見」である。20世紀の思想史家であるブルーメンベルクを、ほかでもなく「哲学者」として取り上げ、現代の古典としてその精髓を吸い上げるように読解する様は、ドイツにおける研究の相当な蓄積と、文化哲学的問題関心に対する真摯な態度のみがなせる技であるように思われた。いまだ日本の研究状況においては情報不足の感があるこの分野の追求こそ、報告者の今後の研究課題とする所存である

報告者はもともと、キール滞在先立ち、同じくドイツのボッフム大学にすでに留学中であつた。本助成がなかったとすれば、新天地への移籍もなかったであろうし、新しい研究に対する思い切った第一歩も踏み出せなかったように思う。もし仮にそうであり、したがって失意のうちにドイツを後にしなければならなかったのかと思うと、本助成に対する感謝の意は言葉に表すことができないほどである。